論文の内容の要旨

論文題目：

関係性の表現

ヴァルター・ベンヤミンとモナドロジー

氏名：茅野大樹

本研究は、ヴァルター・ベンヤミンによる一九一〇年代から一九二〇年代にかけての著作を主な考察対象とし、この時期のベンヤミンの認識論の発展と展開において、ライプニッツ哲学の受容と解釈が果たした役割を明らかにするものである。その際には、ベンヤミンとライプニッツとの直接的な影響関係だけでなく、ベンヤミンが触れることのできたライプニッツの解釈史も考察の対象に加えられる。とりわけ新カント主義、初期ロマン主義、ゲーテ等によるライプニッツ解釈との比較検討、そしてそれらとの対決によるベンヤミン自身の認識論の変遷の軌跡を再構成することが、本研究の中心的課題を成す。

ライプニッツの受容と解釈という観点を導入する時、ベンヤミンの多くのテクストにおいて「関係性 Relation, Beziehung」の概念が中心的な問題として浮かび上がることを本研究は指摘した。ベンヤミンによる関係性概念の規定は常に一定ではなく、その思索の過程ではその意義の明らかな転換すら見出される。それゆえ本研究では、ベンヤミンの認識論の形成過程を、この関係性概念の定義の変化に沿って再構成することを試みた。

第一章では、コーヘンやカッシーラーを中心とした新カント主義マールブルク学派におけるライプニッツ主義の問題と、初期ベンヤミンのカント論およびヘルダーリン論に見られる同学派からの影響を論じた。コーヘンにおいてライプニッツの学説は、微分法のような数学的原理に基づく思惟の客観法則によって、あらゆる経験における直観的な認識要素を根拠付ける科学的な認識批判の基礎となっている。マールブルク学派からの顕著な影響と同学派との対決は、ベンヤミンの「来たるべき哲学のプログラム」に見出されると共に、そ

こでの直観的意識を伴う主観の形式に依拠しない認識論の構想は、その後のベンヤミンの認識論の基本的な前提となることが指摘された。

本研究はさらに、ベンヤミンの「ヘルダーリンの二つの詩」におけるカッシーラーからの影響にも注目した。カッシーラーは、経験における直観の要素を集積する方法から、認識の個々の要素同士の関係を同一の思惟法則によってアプリオリに統一する方法への変遷を、近代科学の認識論的パラダイムの基礎が〈実体 Substanz〉から〈関数＝機能 Funktion〉の概念へと移行する過程として捉えている。そして延長を持たない純粋に精神的な原理としてのライプニッツのモナド説は、その先駆けの一つであった。ベンヤミンはヘルダーリンの詩の解釈において、芸術の理念が展開される詩の圏域を「詩作されるもの das Gedichtete」と呼ぶが、そこでは詩の個々の要素が量的な直観の対象から質的な「機能」となり、それらの純粋な「関係性」のみが表現されると言われる。本研究は、ここに初期ベンヤミンの関係性原理に基づいたモナドロジー的思考の最初の萌芽を見出した。

第二章においては、主にベンヤミンの『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』に焦点を当てた。シュレーゲルとノヴァーリスの解釈において、ベンヤミンがその認識論の基本構造として抽出するのは、初期ロマン主義者たちがフィヒテから継承した「自己反省 Selbstreflexion」の理論である。ロマン主義の反省概念を特徴付ける「直接性」と「無限性」は、この時期のベンヤミン自身の関係性概念をも特徴付ける。つまり反省とは思惟が〈直接的〉に思惟自身に向かう自己への関係性の表現に他ならず、自己の内で満たされた思惟が思惟の形式そのものを思惟することで、思惟の内容は〈無限〉に産出される。本研究は、シュレーゲルにおける反省の絶対的産出の形式が、自己の内に宇宙全体を孕むライプニッツのモナドを一つのモデルとしていたことを指摘した。

ベンヤミンによればアテネウム期ロマン主義の芸術論においては、上述の思惟の自己反省の原理が芸術作品の構造に適用されている。そこで芸術作品は原作者の主観的な恣意の産物ではなく、客観的な芸術の理念の自己反省が展開される〈媒質 Medium〉であり、作品は思惟が自己反省するかのように、批評や翻訳によって累乗的に高まる（解釈される）無限の発展過程を内包する。本研究は、ロマン主義とベンヤミンによる芸術作品の理論に、宇宙の「生きた鏡」として自己の内に世界の全体を表出するモナド的構造を指摘した。他方でベンヤミンは、近代において断片となったあらゆる作品とジャンルを統合し、〈一つの作品〉の全体性へと漸進的に高まる「ロマン的ポエジー」の理念に対して、相対的に完成したトルソーとして特徴付けられる、ゲーテの古典主義的な芸術作品の理論を対比する。この点に本研究は、後の『ドイツ悲劇の根源』のモナドロジー解釈に見られる、個々の離散した要素の調和的な関係性概念の基礎を見出した。

第三章では、ロマン主義論と「ゲーテの『親和力』」を中心としたベンヤミンによる一連のゲーテ論に焦点を当てると共に、両者のライプニッツ解釈の差異を論じた。ゲーテにおいて自然の内に見出されるあらゆる形態は、形成の過程において無限に多様な変化を見せながら、常に同一の普遍法則をも表現している。ライプニッツのモナドは、このような自然の

自発的な形成原理に一つのモデルを提供している。ゲーテに特徴的なのは、このような自然の内的な形成の力の原理を、あくまで具体的な経験において直観しようとしたことにある。ゲーテの「原現象 Urphänomen」の概念は、このような意味で、自然の普遍的原理が直観に対して生き生きと啓示されることとして理解される。本研究は、ベンヤミンがゲーテの原現象をプラトン的イデアに引き付けて解釈する際に、現象におけるイデアの直観不可能性が強調されることに着目した。そしてこのゲーテ受容は、反省の無限の自己産出によって現象から理念への連続的な移行が考えられる媒質的な関係性原理から、断絶した両者の「潜在的な同一性」の関係を問うに至る、関係性概念の転換点として位置付けられた。

ベンヤミンの「ゲーテの『親和力』」は、そのように自然において直観されずに隠されたイデアの表現の問題を、芸術作品の内で問う作品批評の試みである。本研究は、小説中で顕在化する人物たちの神話的な運命の連関に対して、死すべき人間が持つ究極的な「希望」としての不死性の理念が、作品の「真理内実」として隠されていることをベンヤミンの解釈から導き出した。晩年のゲーテは、ライプニッツのモナドに魂の不死の活動性の理念を見ていたが、それはまたベンヤミンとゲーテのライプニッツ解釈の差異にも関わる。つまりベンヤミンは、モナド的な不滅の形成原理を自然の現象の内に直観するのではなく、芸術作品の内に潜在的に表現される理念（イデア）としてのみ認めた。本研究は、同様の差異をゲーテの「原現象」とベンヤミンの「根源 Ursprung」の概念の差異にも見出し、自然の領域から歴史の領域への移行を示す「根源」概念を、現象において隠されたイデアを歴史として表現する、潜在的な関係性の原理として位置付けた。

第四章においては、ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』を主にモナドロジー解釈の観点から読解した。同書の「認識批判序論」において、イデアは現象における志向的な認識の連関によって構成されない、それ自身で自存する所与の存在として特徴付けられる。このようなイデアと現象の関係性は、互いに異質なものの「表出 Darstellung」あるいは「表現 Repräsentation」の関係として理解できる。つまり両者の間には外形的にいかなる因果性や類似性もないが、構造的な類比性によって相互の〈対応〉関係を考えることができるのである。ライプニッツにおいて諸々のモナドは、そのように互いに一切の実在的な影響を持たないが、同一の宇宙を個々の視点から独自に表現することにおいて全体が「調和的」関係にある。ベンヤミンはこの関係性原理を、独立して触れ合うことのない恒星（イデア）同士の調和に適用すると共に、イデアによって表現された現象の諸々の要素の「配置 Konfiguration」に、それと類比的な構造を見出している。本研究は、ベンヤミンのモナド解釈の中心に、過去から未来に渡る宇宙の歴史の全体を潜在的に内包する時間の構造を見出すと共に、ベンヤミンによるドイツ・バロック悲劇の解釈を、モナド的な時間の構造によって現象とイデアの潜在的な〈表現＝対応〉の関係を表出する試みとして読解した。

ベンヤミンはバロックにおける内在的な世俗世界と超越的なイデアとの対立を度々強調するが、バロック悲劇の時間、悲しみの感情とメランコリー、そしてアレゴリー的言語という三つの主題は、いずれもイデアと現象の〈表現〉関係を示唆する時間の構造を示唆して

いる。優柔不断な専制君主による現世での復興の理想の遅延によって、バロック悲劇の歴史は被造物の滅びの過程を永続化し、未来へ向かう歴史の流れを停滞させる。また悲しみに沈む被造物のメランコリーは、その曖昧な知覚の内におぼろげに未来の災厄を予知することで、現在の時間に未来からの時間を呼び込む。そして細断された言語の破片としてのアレゴリーは、被造物の滅びの歴史の全体を解釈によって発見されるべき暗号として隠している。本研究は、これらドイツ・バロック悲劇の諸形式において、歴史の全体を現在という時間の内に潜在的に内包するモナド的な歴史の構造が、いずれも現象とイデアの〈表現＝対応〉の関係を示していることを指摘した。

最後に結語において、『ドイツ悲劇の根源』以降の知覚論、記憶論、歴史哲学などをめぐるベンヤミンの後期のテクストにおいて、モナドロジー的な思考のさらなる展開を読み込む可能性が展望された。